

南九州の葬制に関する研究

—宮崎県国富町前の原地下式横穴墓群第1次発掘調査報告（遺構編）—

Studies of the Burial Customs in Southern Kyushu

A First Excavation Report with the Special Reference to the Archaeological
Features of the Tombs of Maenohara Underground Corridor-style Burial
Chambers in Kunitomi, Miyazaki Prefecture

鹿児島女子短期大学児童教育学科 大 西 智 和

鹿児島大学歯学部口腔解剖学講座Ⅱ 竹 中 正 巳

1 調査の経過

1. 1 調査に至る経過

地下式横穴墓は古墳時代の南九州の東半分
で盛んに造営された。地下式横穴墓分布域の
中で、古人骨の形質や副葬品のあり方から、
宮崎平野部と現在のえびの市・小林市などを
中心とする内陸部（南九州山間部）との間に
地域差の存在が指摘されてきた。山間部の地
下式横穴からは、現在までに、多数の古墳時
代人骨が出土している。しかし、宮崎平野部
からは、10体を越える程度の人骨しか出土し
ていない。地下式横穴墓分布域内での地域差
を含め、古墳時代の南九州に居住した人々の
形質・文化・生活をより詳しく明らかにする
ためには、宮崎平野部からより多くの人骨が
出土する必要がある。

宮崎県東諸県郡国富町前の原地下式横穴墓
群は、1998年11月、NTTドコモの電波中継
施設建設に伴い、国富町教育委員会による緊
急発掘調査が行われた。その際、3基の地下
式横穴墓が検出され、前の原地下式横穴墓群
と命名された。3基の地下式横穴墓の内の1
基（3号墓）の玄室内には、玄門からの埋土
の流入や天井の崩落もなく、最終埋葬時の玄
室内状況が、かなりよく保存されていた。保存
のいい人骨2体をはじめ、朱玉、鉄鏃、刀子、
勾玉、管玉、玉や植物の種子が得られた。前の

原地下式横穴墓群は、宮崎平野部の地下式横
穴墓の中でも、保存良好な人骨が遺存してい
る可能性が高く、人骨をはじめ考古学的・人類
学的情報を得るための発掘調査を行うのであ
れば、最適な調査地のひとつと考えられた。

我々は、平成13年度の鹿児島女子短期大学
附属南九州地域科学研究所研究補助金の援助
を受け、宮崎平野部の地下式横穴墓から保存
良好な人骨の発掘と、様々な考古学的・人類
学的情報を得ることを目指して、2002年3月
21日から2002年3月31日まで、宮崎県国富町
前の原地下式横穴墓群の発掘調査を行った。

1. 2 調査の体制（所属は当時）

発掘調査は以下の体制で行った。

調査主体者：大西智和 鹿児島女子短期大
学児童教育学科講師
竹中正巳 鹿児島大学歯学部
口腔解剖学講座Ⅱ助手

調査参加者：相美伊久雄

金峰町教育委員会

中村祐一 鹿児島大学法文学
部人文学科4年

市来真澄 鹿児島大学法文学
部人文学科3年

藤井大祐 鹿児島大学法文学
部人文学科3年

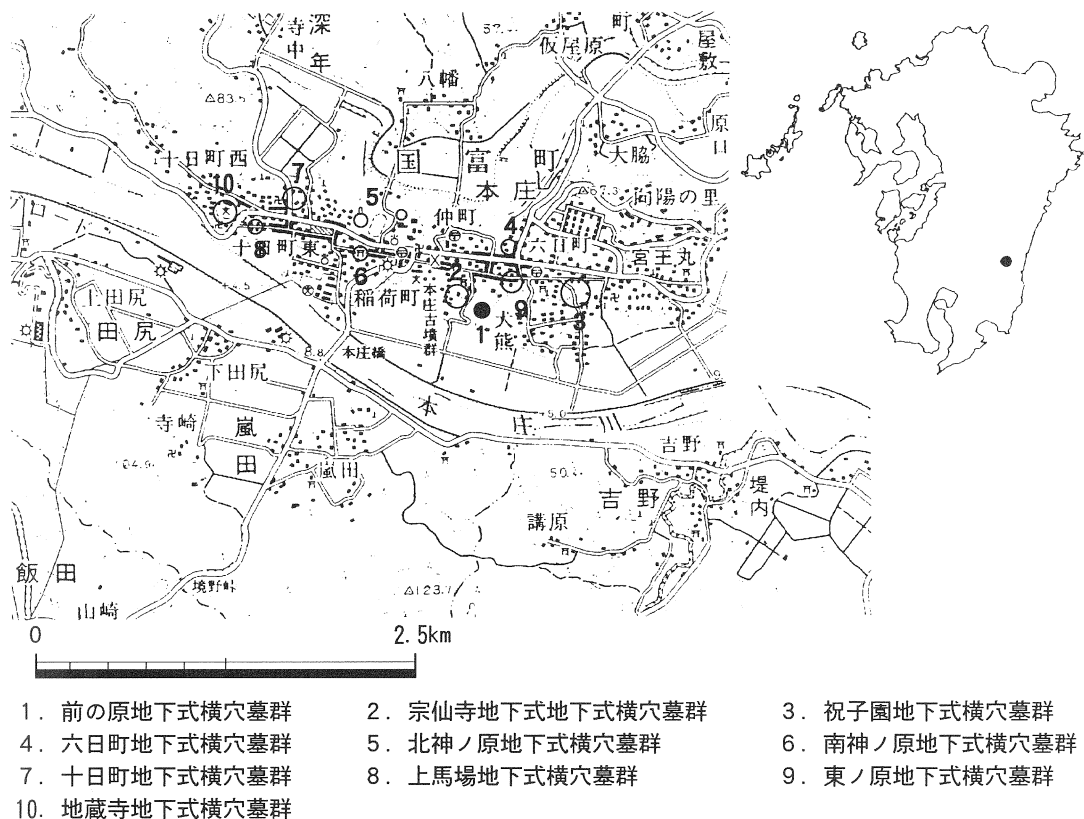


図1 前の原地下式横穴墓群とその周辺遺跡 (1/50,000)

北岡美幸 鹿児島大学法文学
部人文学科3年
廣瀬育子 鹿児島大学法文学
部人文学科3年

須恵器などが出土している。上馬場からは、刀や鍬が、東ノ原からは、刀子、鍬、玉類や須恵器などが、地藏寺からは、刀、刀子や鋤先が出土している。現在では、本庄古墳群内の地下式横穴墓群を一括して本庄地下式横穴墓群とも呼んでいる（第4回九州前方後円墳研究会実行委員会編、2001）。

1. 3 周辺の遺跡（図1）

前の原地下式横穴墓群は、国富町市街地のある本庄台地上に所在する国指定史跡本庄古墳群内に位置する。本庄古墳群内には、祝子園、宗仙寺、六日町、北神ノ原、南神ノ原、十日町、上馬場、東ノ原、地藏寺、上ノ原の各地下式横穴墓群が点在する。祝子園からは、鉄鍬、刀子や須恵器が、宗仙寺からは、鏡、甲冑、剣、刀、馬具、鋤先、玉類や須恵器などが出土している。六日町からは、鏡、甲冑、刀や玉類などが、北神ノ原からは、刀、馬具、耳環、玉類や須恵器などが出土している。南神ノ原からは、剣、刀、土師器や須恵器などが、十日町からは剣、刀、馬具や

1. 4 調査の経過

調査地点は国富町本庄4435に所在する。2002年（平成14年）3月21日から調査に着手した。調査区は、国富町教育委員会が以前に発掘調査を行った地点から約20m東側、南北約70m、東西約7mの範囲である（図2・写真1）。3月21日午後から宮崎県教育庁文化課の東憲章氏の協力を得て、調査区内の地下レーダー探査を実施した（写真2）。現場で反応が確認された地点を中心に、竖坑確認のためのトレンチを設定した。トレンチは、計7ヶ

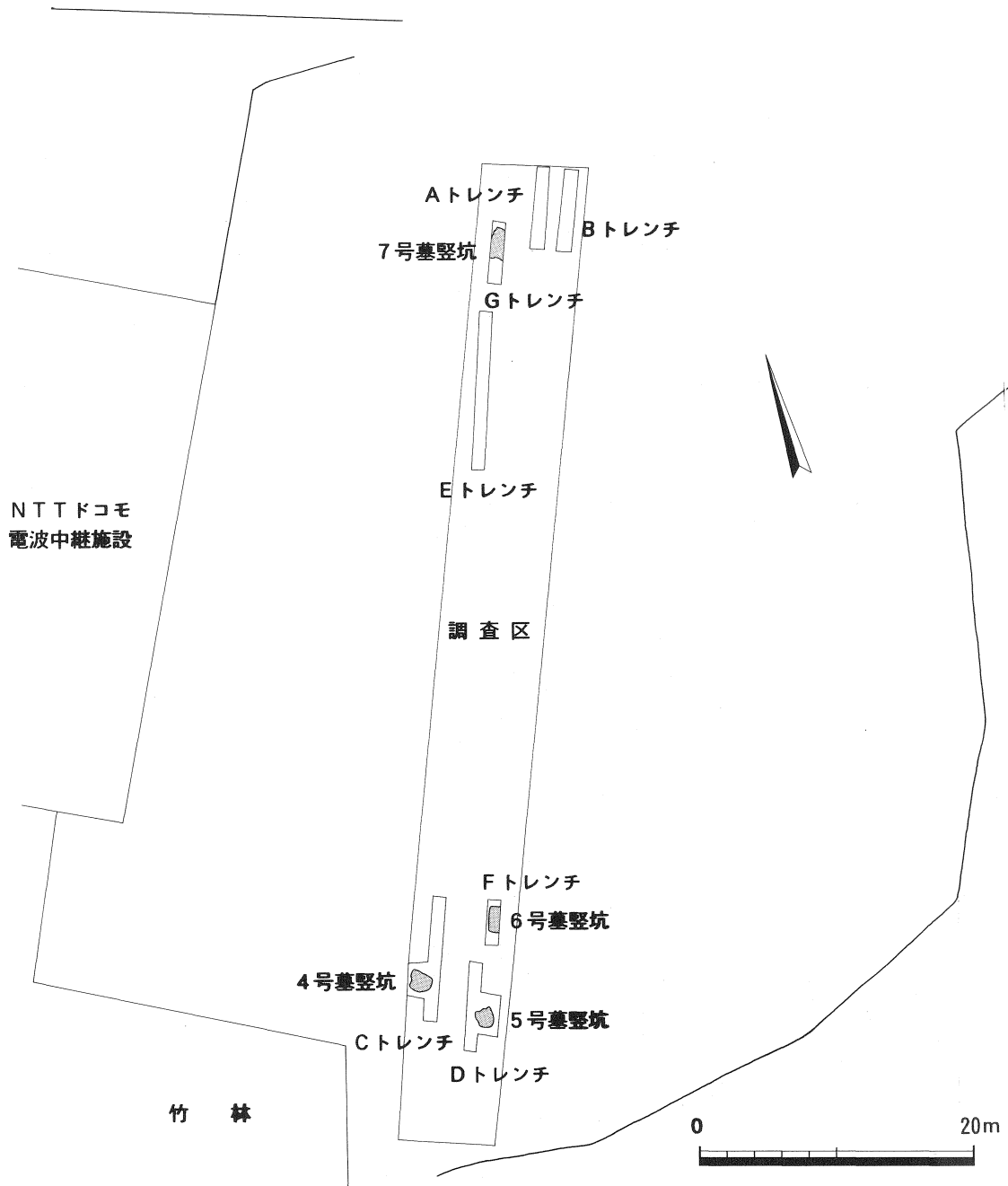


図2 トレンチ配置図 (1/500)



写真1 調査区全景 (中央部分が調査区)

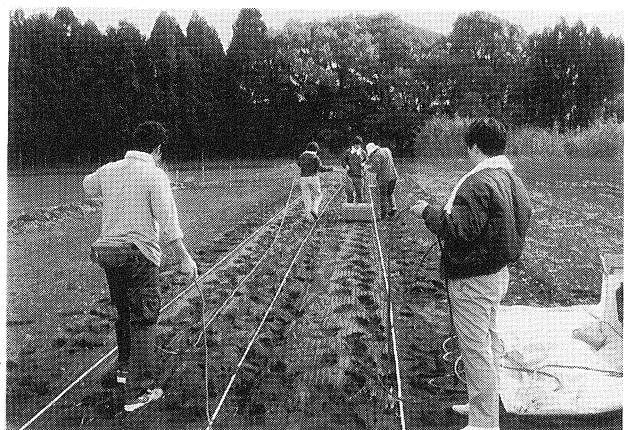


写真2 地下レーダー探査風景

所 (A～G) に及んだ。C トレンチで確認された地下式横穴墓を4号墓、D トレンチで確認された地下式横穴墓を5号墓とした。3月24日に4号墓の竪坑の掘り下げを開始した。竪坑内からは土師器や須恵器が遺存良好な状態で出土した。実測を進めながら掘り下げ、3月27日には竪坑の掘り下げが完了した。内部は天井の部分的な崩落などで、かなり埋没していたため、土砂の除去を進めた。玄室内には2体の人骨と副葬品が遺存していた。実測を行い、3月29日には遺物の取り上げを行った。5号墓は3月25日に竪坑の掘り下げを開始した。3月26日には竪坑の掘り下げを完了したが、玄室の内部はかなり埋没しており、土砂の除去を行った。玄室内には礫が敷かれており、人骨は遺存していなかったが、副葬品が残っていた。実測を行い、3月30日に遺物の取り上げを行った。3月31日には埋め戻しを行い、現地における作業を終了した。

2 トレンチの調査

2. 1 トレンチの配置 (図2)

幅約1mのトレンチを南北方向に7ヶ所設定した。C・D トレンチでは検出できた地下式横穴墓の調査を行うためにトレンチの拡張を行った。トレンチ断面の観察により、地下式横穴墓群築造当初の地上部の構造の解明を試みたが、耕作による攪乱が、竪坑検出面にまで及んでいたため、墳丘や竪坑上の構造物の有無を明らかにすることはできなかった。

2. 2 基本層位

基本層位は以下のとおりである。

1 層

表土層で、7.5YR2/2 (黒褐色) を呈するシルト層。2層と基本的に同じであるが、日常的に耕耘機による攪乱を受けている層である。

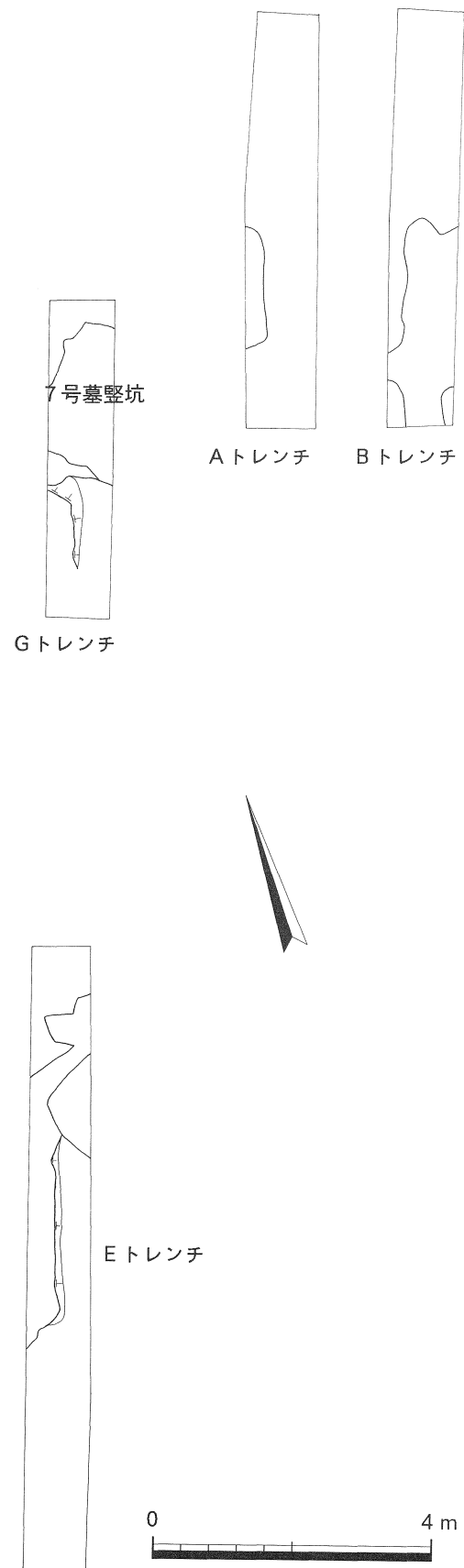


図3 A・B・E・G トレンチ平面図 (1/100)

2 層

7.5YR2/2（黒褐色）を呈するシルト層。以前に耕耘機による攪乱を受けている。巻き上げられたアカホヤのブロックが含まれている。これは、攪乱の一部が、2層の下に位置するアカホヤにまで及んでいたためである。古墳時代の地表面は1～2層の間のいずれかの位置にあったものと考えられる。

3 層

いわゆるアカホヤ火山灰層で、色調は7.5YR6/8（橙色）他を呈する。南側のトレンチでは、この層は見られない。

4 層

10YR2/3（黒褐色）を呈するシルト質層で、角張った礫を含む。

5 層

10YR4/3（にぶい黄褐色）、10YR3/4（暗褐色）、10YR4/4（褐色）を呈するシルト層。上方が暗く、下方に向かって明るい色調を呈する。地下式横穴墓の床～壁面に相当する。

2. 3 A トレンチ

概要（図3）

A トレンチは調査区の北東隅近くに位置し、長さ約6mである。本トレンチとB トレンチは、以前このあたりが陥没したという情報をもとに設定した。南よりの西端部分で長さ1.7m以上、幅0.25m以上の落ち込みを確認した。落ち込みには、埋土に下位にあるはずの褐色のシルト質ブロックが見られないことから、それほど深くはないものと思われ、竪坑の可能性は高くないと考えている。掘り下げは行わなかったため、性格を確定することはできなかった。

トレンチ断面図（図5）

地表から平均で0.5mほど掘り下げた。落ち込みは、2層から掘り込まれているため、か

なり新しい時期のものと考えられる。

2. 4 B トレンチ

概要（図3）

B トレンチは調査区の北東隅、A トレンチの1m東側に設定し、長さは約6mである。南側では長さ3m以上、幅1m以上の落ち込みを確認した。掘り下げは行わなかったため、性格は不明である。

トレンチ断面図（図5）

地表から平均で0.55mほど掘り下げた。トレンチの西側で確認された落ち込みは3層上面で確認された。南側はアカホヤが落ち込みの埋土上に載っているが、これは耕耘機の攪乱が引き起こしたのであろう。落ち込みの埋土上部も耕耘機による攪乱を受けているため、時期は古いものであってもよいことになる。

2. 5 C トレンチ

概要（図4・写真3）

C トレンチは調査区南端部付近の西側に設定し、長さ約9mである。トレンチの南側で竪坑を検出した。断面図作成後、竪坑の輪郭を検出するために、南北に約2.5m、西側に約1.3m拡張した。本トレンチで検出した墓は、以前に国富町教育委員会が3号墓までの発掘調査を行っているため、それに続き4号墓と呼ぶことにした。

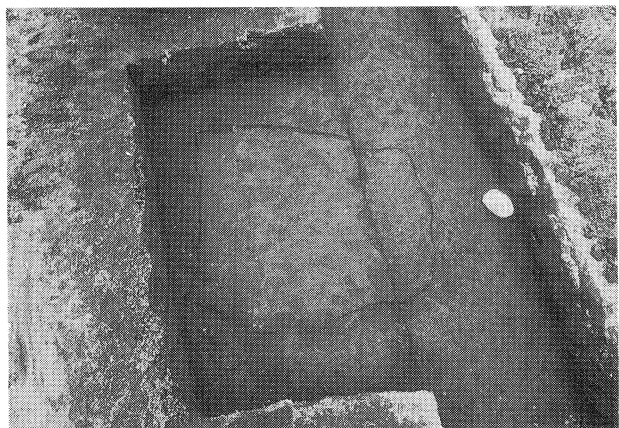


写真3 C トレンチ 4号墓竪坑検出状況

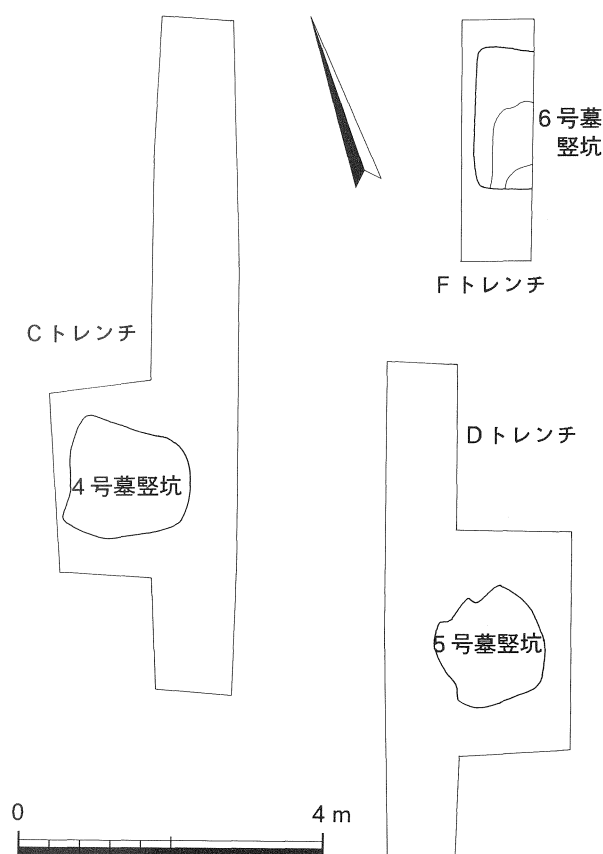


図4 C・D・Fトレンチ平面図 (1/100)

トレンチ断面図 (図5)

地表から0.5~0.6mほど掘り下げた。本トレンチでは3層のアカホヤは見られない。4号墓の竪坑は②層上面で確認された。②層は4層と同じものと考えられるが、色調が異なっていたため分層した。

出土遺物

弥生時代から古墳時代にかけての土器片が比較的多く出土している。また、黒曜石製の剥片も見られる。

2. 6 Dトレンチ

概要 (図4・写真4)

Dトレンチは、Cトレンチから約2m東側に設定し、長さ約2.6mである。中程の東壁付近で竪坑を検出したため、これを5号墓と呼ぶことにした。トレンチ断面実測図作成後、南北に約3m、東側に約1.5m拡張し、竪坑の

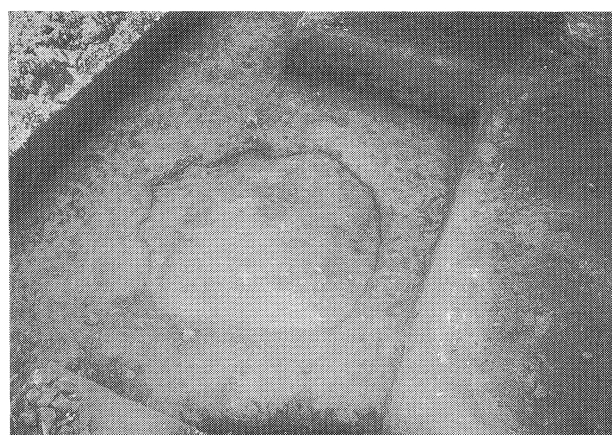


写真4 Dトレンチ 5号墓竪坑検出状況

全形を確認した。

トレンチ断面図 (図5)

地表から平均で0.35mほど掘り下げた。本トレンチにもアカホヤは確認されない。5号墓は4層上面で確認された。2層中には耕耘機による攪乱のため4層から巻き上げられた礫が見られる。

出土遺物

黒曜石製の剥片が出土している。

2. 7 Eトレンチ

概要 (図3・写真5)

調査区北寄り西端部、Aトレンチの南西約6mのところに設定し、長さ約9mである。北側で方形を呈すると思われる落ち込み (長さ1m、幅0.9m以上) と、不整形の落ち込み (長さ1.6m、幅1m以上) を確認した。掘り下げていないため、性格は確定できなかったがプランの形態から、弥生時代の住居などの遺構の可能性がある。

トレンチ断面図 (図6)

地表から平均で0.55~0.6mほど掘り下げた。本トレンチの中程で、3層が4層上に載っており、3層と4層の層序関係を確定できた。遺構と思われる落ち込みは3層あるいは4層上面から検出された。埋土にアカホヤのブロックを含むため、本来はもっと上部から

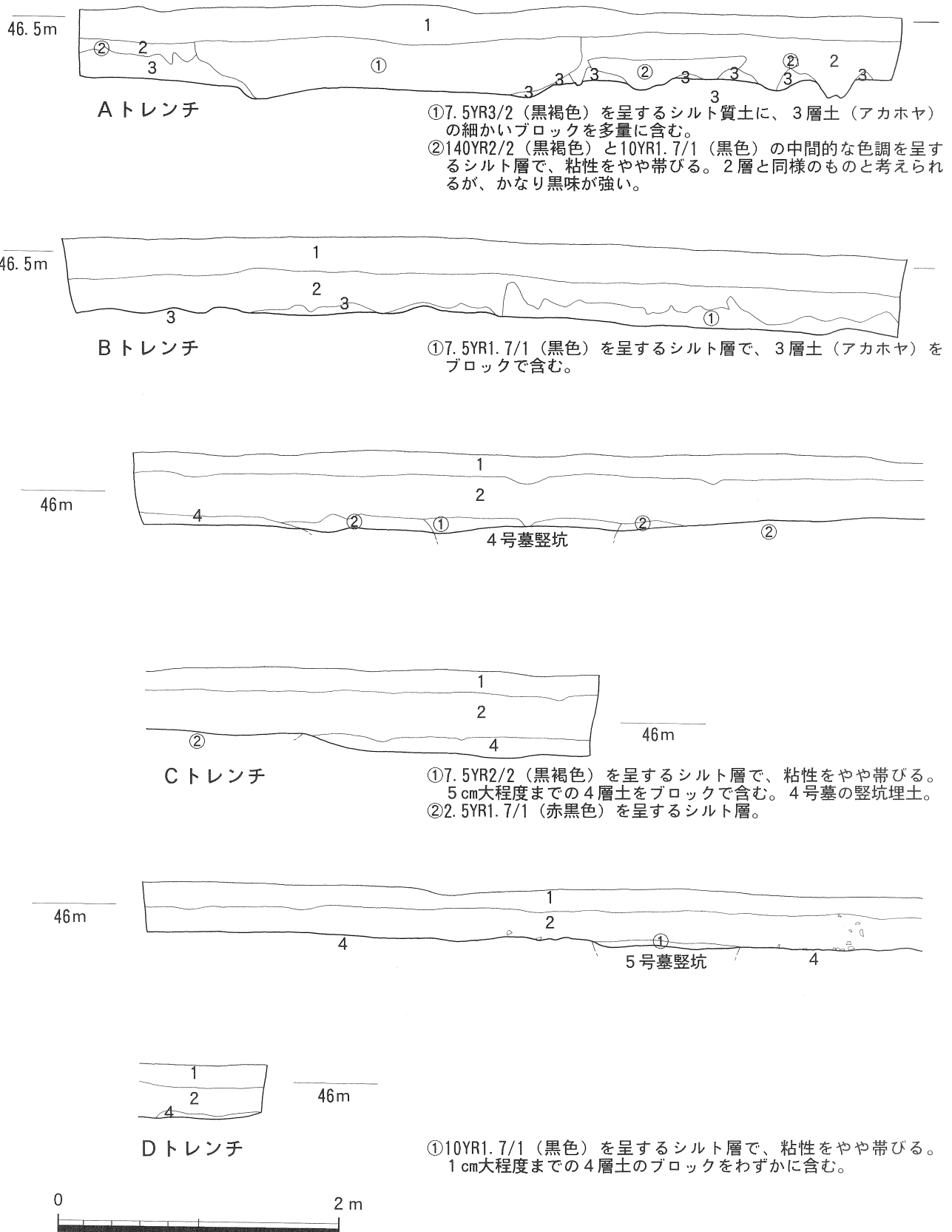


図5 トレンチ断面図1 (1/40)

掘り込まれていたことがわかる。また、本トレンチにはアカホヤがほとんど見られない

が、もともとはアカホヤも一定の厚さで存在していたものと思われる。

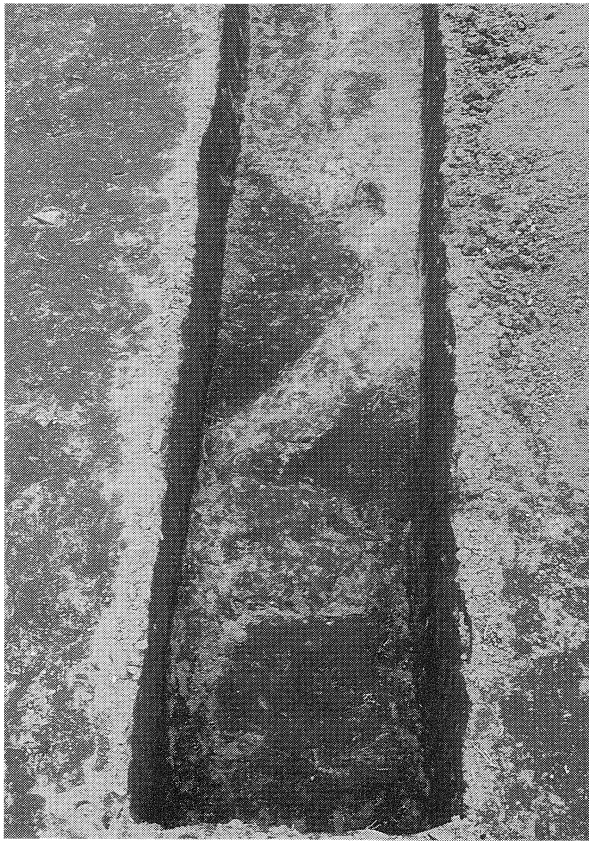


写真5 Eトレンチ 遺構検出状況



写真6 Fトレンチ 6号墓竪坑検出状況

2. 8 Fトレンチ

概要 (図4・写真6)

Fトレンチは、Dトレンチの約1.5m北側に設定した。長さ約3.2mである。竪坑を検出し、その規模は、長さ約1.6m、幅は0.75m以上を測る。6号墓と呼ぶことにしたが、内部の調査は今回見送ったため、トレンチの拡張は行っていない。

トレンチ断面図 (図6)

地表から0.5~0.6mほど掘り下げた。6号墓は4層上面で確認された。埋土は2層に分けられる。

出土遺物

弥生時代から古墳時代にかけての土器片が出土している。

2. 9 Gトレンチ

概要 (図3・写真7)

Gトレンチは調査区北部の西端付近に設定

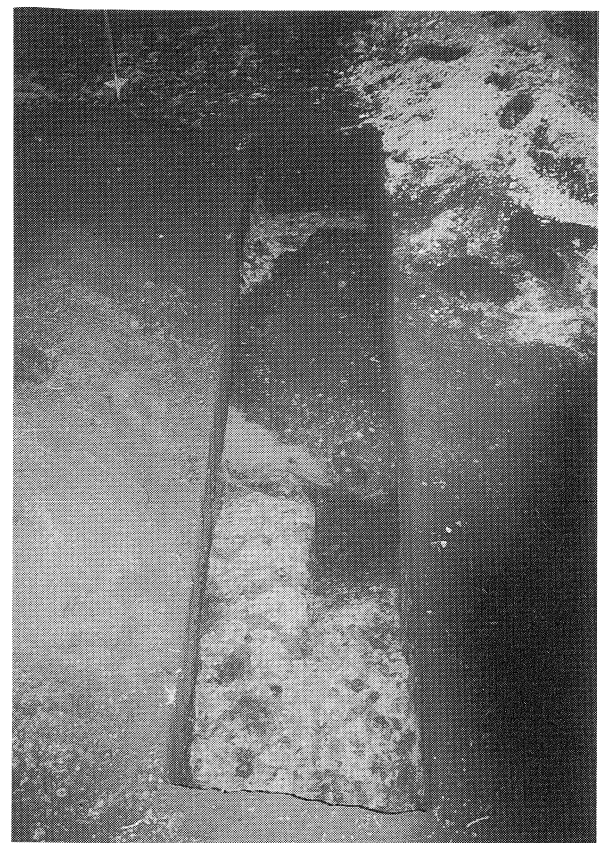


写真7 Gトレンチ 7号墓竪坑検出状況

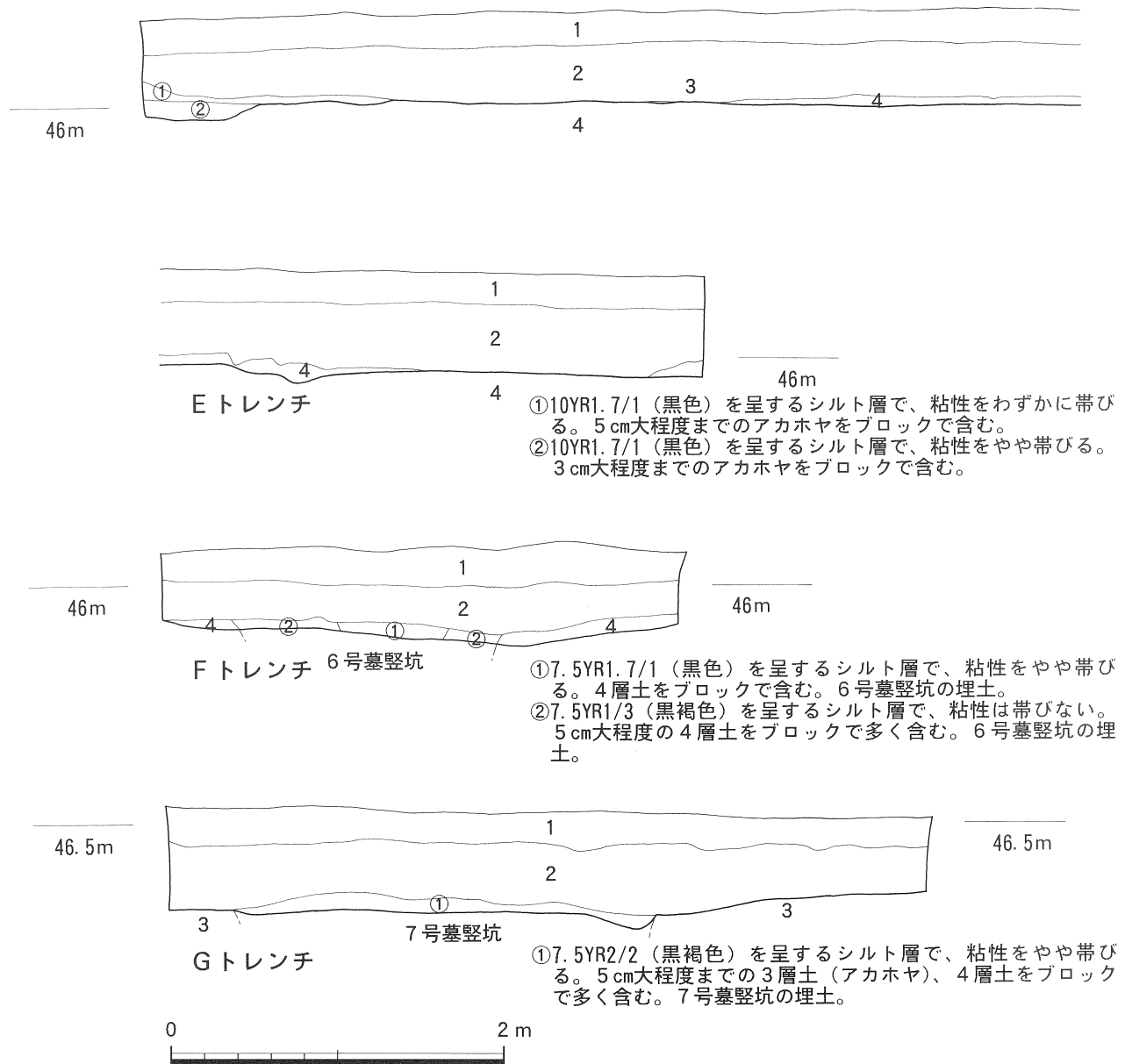


図6 トレンチ断面図2 (1/40)

し、長さ約4.5mである。中央部付近で縦坑を検出し、7号墓と呼ぶことにした。縦坑の長さは2.2m以上、幅は1m以上を測る。今回は内部の調査を見送ったため、トレンチの拡張は行っていない。

トレンチ断面図 (図6)

地表から0.45~0.6mほど掘り下げた。7号墓は3層上面で確認された。

3 4号墓の調査

検出された4基の地下式横穴墓のうち、

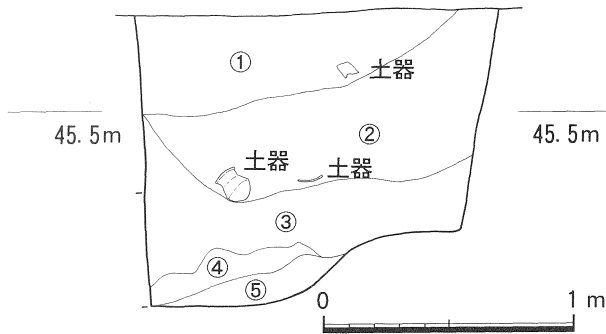
4・5号墓の2基を調査した。4・5号墓は調査区の南側で検出された。縦坑の中心からの距離は約5.5mを測る。また、4号墓縦坑の東北東約7mと5号墓縦坑の北北東約7mには6号墓の縦坑が位置する。

3. 1 縦坑埋土 (図7・写真8)

埋土は黒褐色を呈するシルト層が主である。①~④層には4層土がブロックで含まれている。⑤層土は墓の築造後から埋葬の際に地表から落ち込んだものと思われる。⑤層の

上面は羨門の下方へと続くため、このラインは追葬あるいは、何らかの目的による再度の掘り返しの際の掘り方と考えられる。したがって、玄室は初葬後少なくとも1回は開けられたと推定できる。

③層土は羨門付近で急に高く盛り上げられている。埋め戻しの際にこのような堆積状態になったとすると、羨門部分を意識的に先に埋め戻したことになる。③層上面からは、土師器や須恵器が出土しており、祭祀に伴うものと考えられる。



- ①7.5YR2/2 (黒褐色) を呈するシルト層で、粘性をやや帯びる。5 cm 程度までの4層土をブロックで含む。
- ②7.5YR3/1 (黒褐色) を呈するシルト層で、粘性はほとんど無い。3 cm 程度までの4層土をブロックで多く含む。
- ③7.5YR2/1 (黒色) シルト層で、粘性をやや帯びる。3 cm 程度までの4層土をブロックで含む。
- ④7.5YR4/3 (黒褐色) と7.5YR3/4 (黒褐色) の中間を呈するシルト層で、粘性はほとんど無い。4層土とよく似る。
- ⑤10YR1.7/1 (黒色) を呈するシルト層で、粘性をやや帯びる。当時の表土が落ち込んだものと考えられる。

図7 4号墓竪坑埋土の断面図 (1/30)

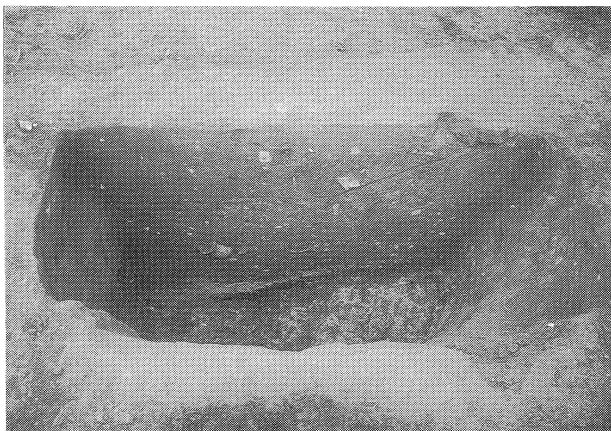


写真8 4号墓竪坑埋土の断面

3. 2 竪坑・羨門・羨道 (図8)

竪坑

竪坑の平面は隅丸のやや不整形な方形で、長さ約1.5m、幅約1.6m、検出面からの深さ約1.2mを測る (写真9)。竪坑の南側には階段状のステップが1段確認できた (写真10)。このステップは墓作りの際や埋葬の際の上り下りのために用いられたと考えられる。

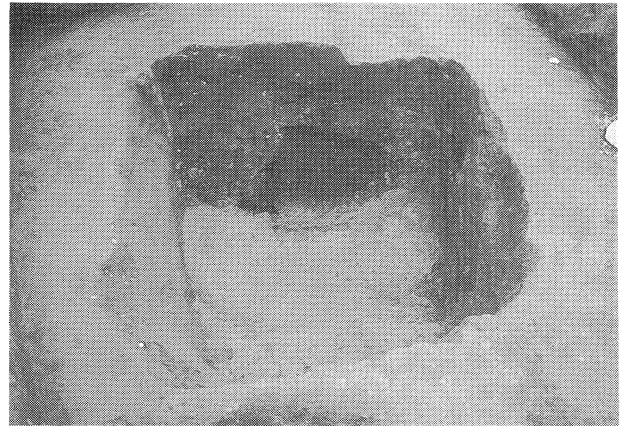


写真9 4号墓竪坑および羨門部

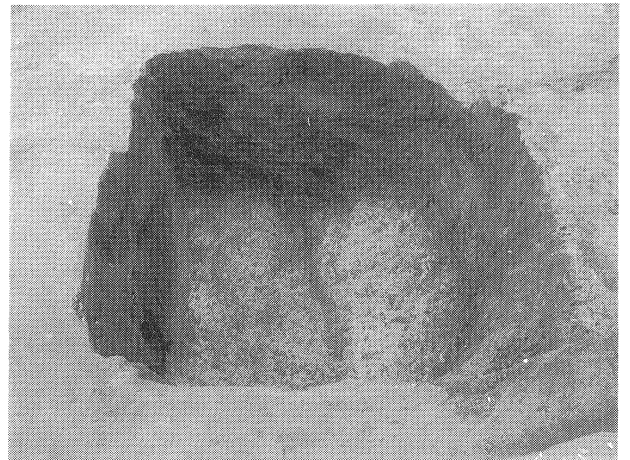


写真10 4号墓竪坑 (右側の段はステップ)

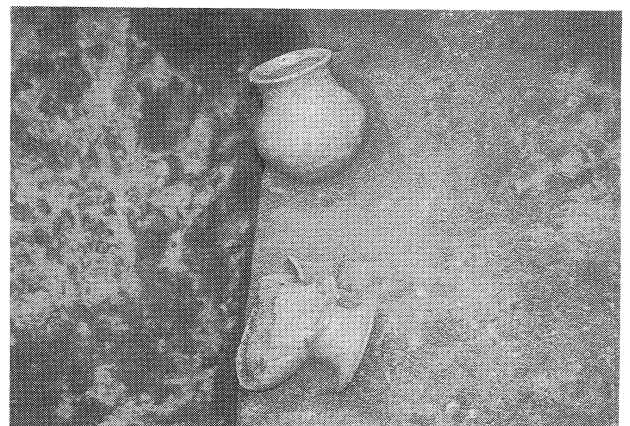


写真11 4号墓竪坑内中央部付近の土器出土状況

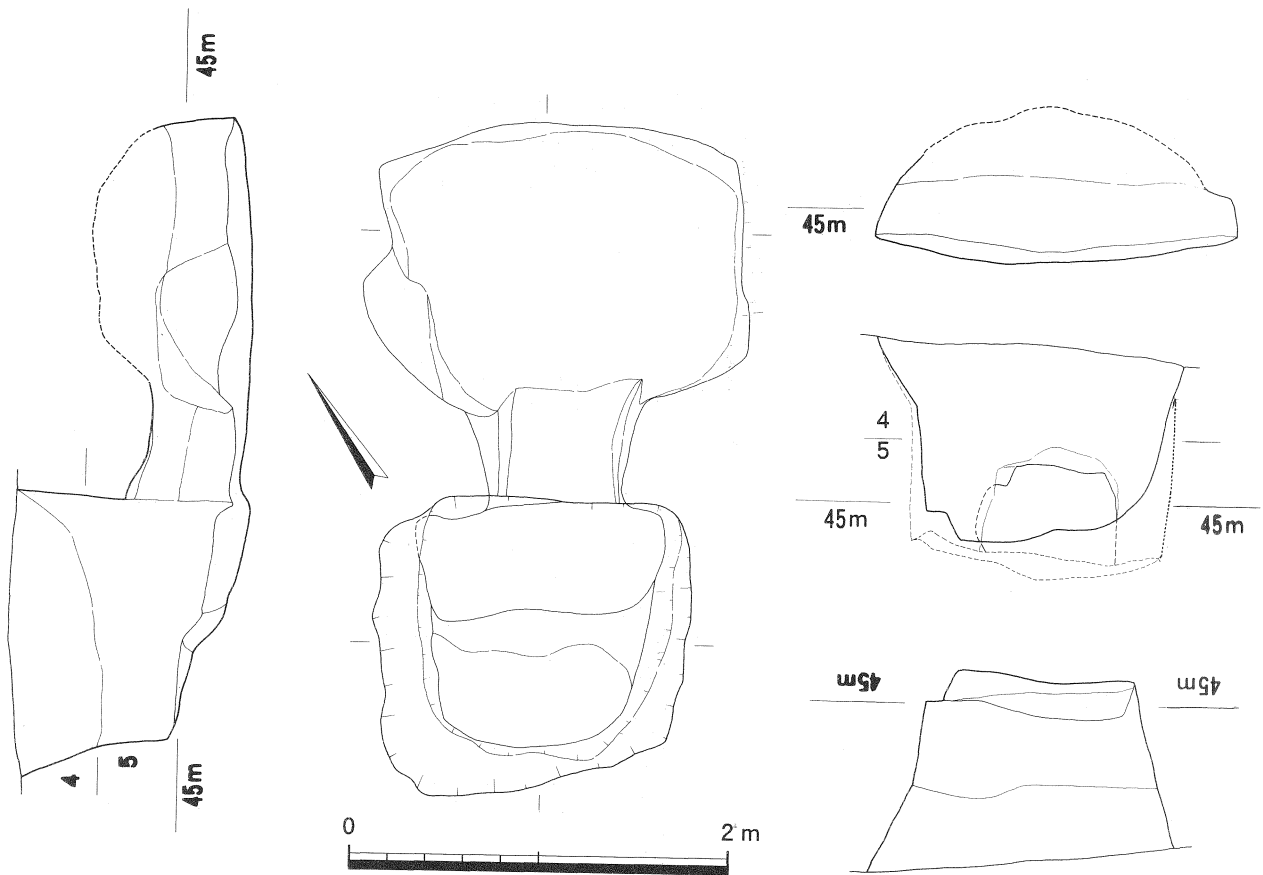


図8 4号墓埋葬施設実測図(1/40)

掘り下げの途中、③層上面で遺存状態の良い須恵器1個体と土師器5個体を検出した(図9)。土器は出土状況から2つのまとまりに分けられる。羨門部の前方から土師器の高杯1点と土師器の壺1点が出土した(写真11)。東隅からは、須恵器の高杯1点と土師器の高杯3点が出土した(写真12)。

竪坑の東隅から出土した土師器の高杯の1



写真12 4号墓竪坑内北東部の土器出土状況

点は、杯部のみであるが、あとはほぼ完全な形に復元できる。

床の平面は、隅丸の台形を呈する。

羨門

羨門は台形に近い形状を呈する。閉塞は板によるものと思われるが、板などの痕跡は見いだせなかった。羨門部での床面幅約0.7m、天井部の幅約0.6m、高さ約0.6mを測る。

羨道

羨道は竪坑北壁のほぼ中央に掘り込まれている。平面は玄室側に向かって広がる台形を呈し、羨門部での幅0.7m、玄室部分での幅は約0.95mである。羨道の長さは約0.6mを測る。

3. 3 玄 室

玄室の構造

玄室は南西に開口する。天井の一部が崩落し、玄室内は奥壁側以外は埋没していた。羨

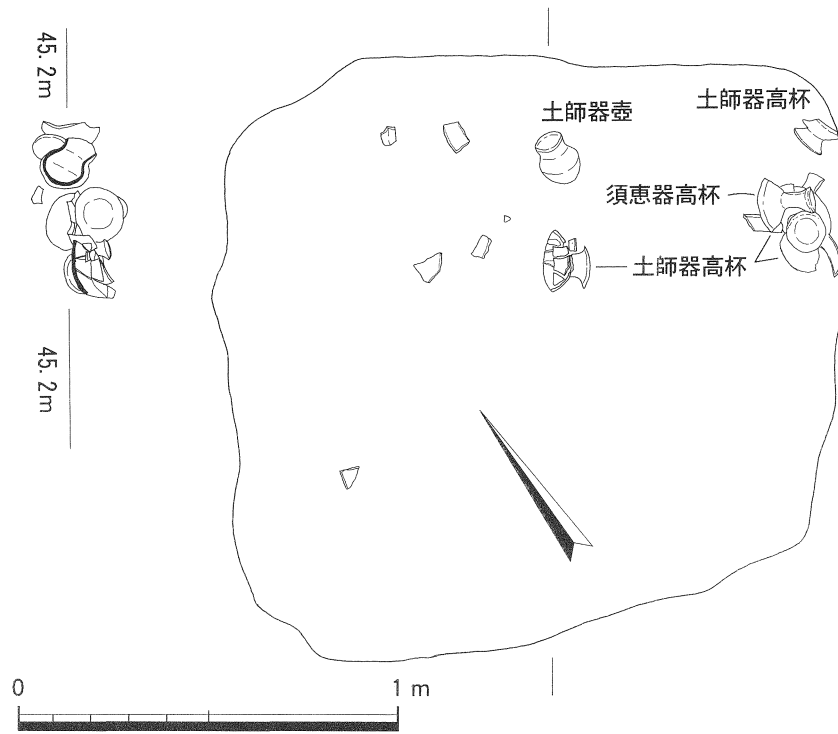


図9 4号墓竪坑内遺物出土状況実測図 (1/20)

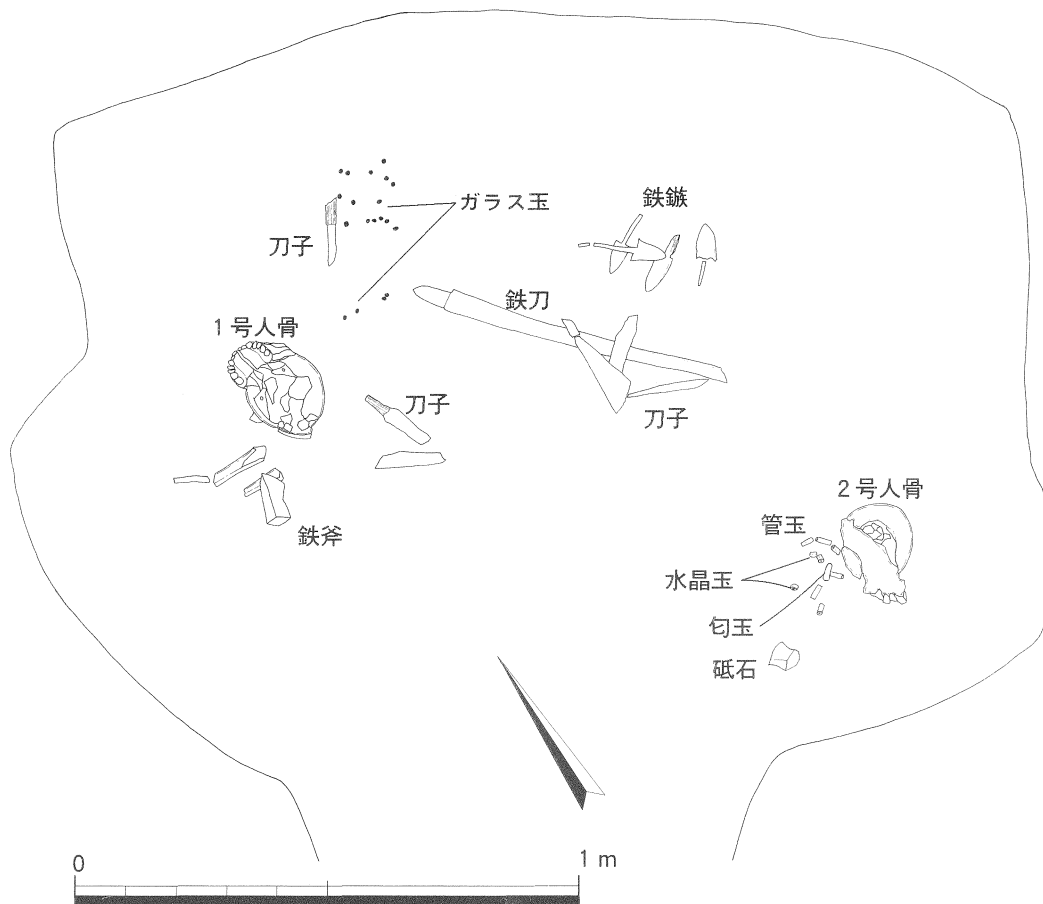


図10 4号墓遺物出土状況実測図 (1/15)

門から奥壁にかけて床面のレベルは、中央付近がやや低く、奥壁側に向かって少し高くなる。玄室の平面プランは平入りの長方形であるが、西壁の手前側が外方に0.2m程度突き出すような形状を呈する。長さは最大部で約1.6m、幅は最大部で約2.0mを測る。天井の形状を明確に知ることはできないが、ドーム形であったと考えられる。高さは不明であるが、現状で0.85m程度を測る。一部に工具痕が見られ、刃の幅4～5cmの手斧状の工具が用いられたと考えられる（写真13）。しかし、刃の幅が明確にわかる部分は見られないため、断定はできない。

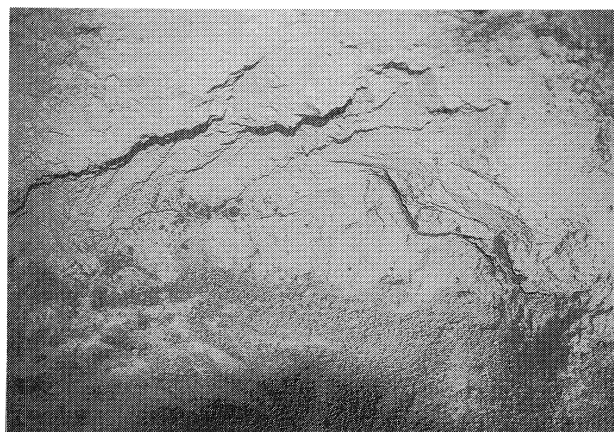


写真13 4号墓玄室天井に残る工具痕

遺物の出土状況（図10）

玄室には、成人が2体、埋葬されていた（写真14・15・16）。奥壁側を1号人骨、羨道側を2号人骨と呼ぶ。流入、崩落した土砂の下に埋没していたため、人骨の遺存状況は良くない。

1号人骨に伴う副葬品として、鉄刀1（写真17）、鉄鍬4（写真18）、刀子3（写真17・19）、鉄斧1（写真20）、ガラス玉100以上が出土している。

2号人骨に伴う副葬品として、砥石1、翡翠製の勾玉1、水晶玉2、碧玉製の管玉9が出土している（写真21）。

人骨

2体が対置埋葬されていた（図10）。1号人骨は頭を西に、2号人骨は頭を東に向けている。両人骨とも、仰向けの伸展位で埋葬されており、赤色顔料が付着していた。

1号人骨（女性・熟年）（写真22）

保存状態はよくない。遺存しているのは、頭蓋と四肢の一部の骨だけである。乳様突起がそれほど大きくないことから、本人骨は女性と考えられる。また、歯の咬耗がMartinの2度であり、熟年と判定した。人類学的計測および観察を行った結果を表1・2に示す。

2号人骨（不明・成人）

保存状態はよくない。遺存しているのは、脳頭蓋の一部だけである。性別は判定できない。遺存している左右の頭頂骨の厚さから、年齢は成人と判断した。

表1 4号墓1号人骨の頭蓋計測値（mm）

M No.	性 別 年 齢	女 性 熟 年
	計測項目	
54	鼻 幅	24

表2 4号墓1号人骨の頭蓋形態小変異出現の有無

性 別 年 齢	女 性 熟 年	
	右	左
口 蓋 隆 起	—	—
内 側 口 蓋 管 骨 橋	—	—
外 側 口 蓋 管 骨 橋	—	—
歯 槽 口 蓋 管	—	—
顆 管 欠 如	—	—
後 頭 顆 旁 突 起	—	—
舌 下 神 經 管 二 分	—	—
頸 静 脈 孔 二 分	—	—
偏 側 頸 静 脈 孔 優 位	—	—
外 耳 道 骨 瘤	—	—
フ シ ュ ケ 孔	+	+
ベ サ リ ウ ス 孔	—	—
卵 円 孔 形 成 不 全	—	—
棘 孔 開 裂	—	—
翼 棘 孔	—	—



写真14 4号墓の人骨と副葬品の出土状況（左：1号人骨、右：2号人骨）



写真15 4号墓の人骨と副葬品の出土状況（1号人骨とその周辺）



写真16 4号墓の人骨と副葬品の出土状況（2号人骨とその周辺）

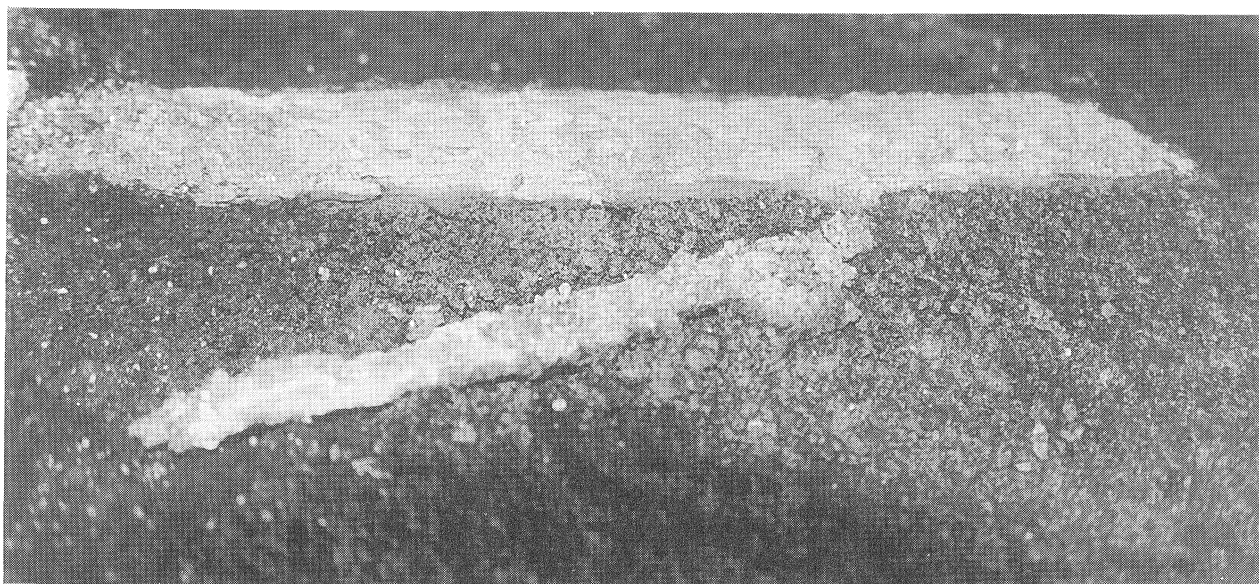


写真17 4号墓副葬品出土状況（鉄刀・刀子）

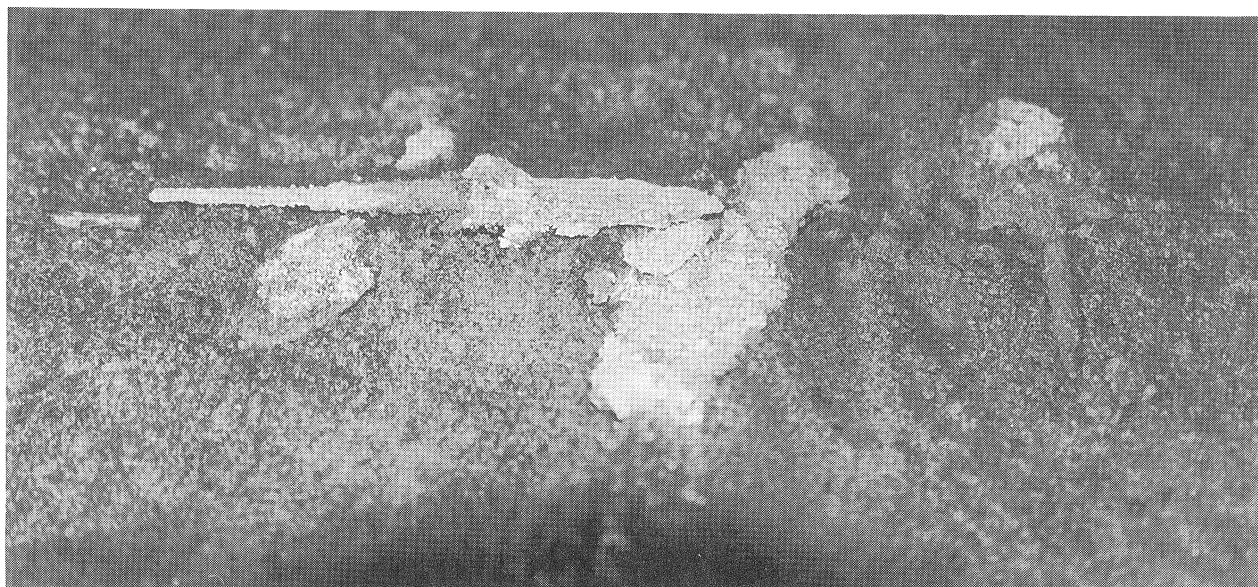


写真18 4号墓副葬品出土状況（鉄鏃）



写真19 4号墓副葬品出土状況（刀子）



写真20 4号墓副葬品出土状況（鉄斧）

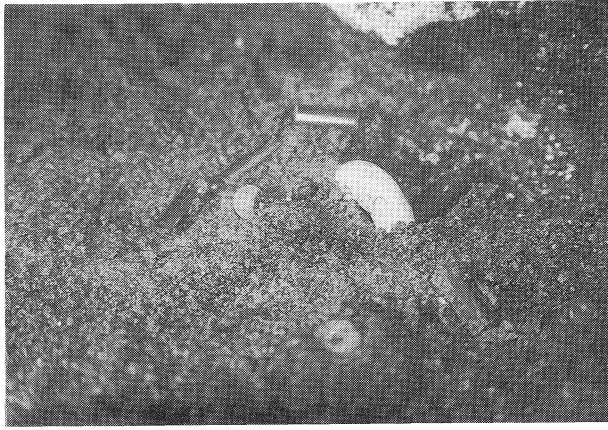
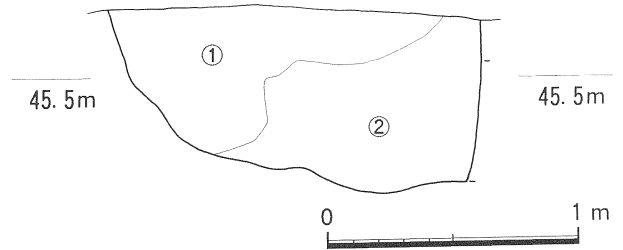


写真21 4号墓玉類出土状況



①10YR1.7/1 (黒色) を呈するシルト層で、粘性をやや帯びる。1 cm大程度までの4層土のブロックをわずかに含む。表土層を埋め戻しに用いたものと考えられる。羨門部付近はやや明るい色調を呈する。
②10YR4/3 (にぶい黄褐色) ~10YR3/4 (暗褐色) を呈するシルト層。4層土を埋め戻しに用いたものと考えられる。

図11 5号墓竪坑埋土の断面図 (1/30)

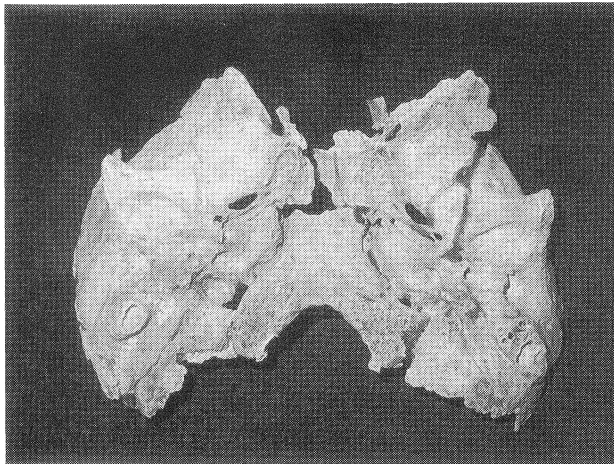


写真22 4号墓1号人骨 (女性・熟年)

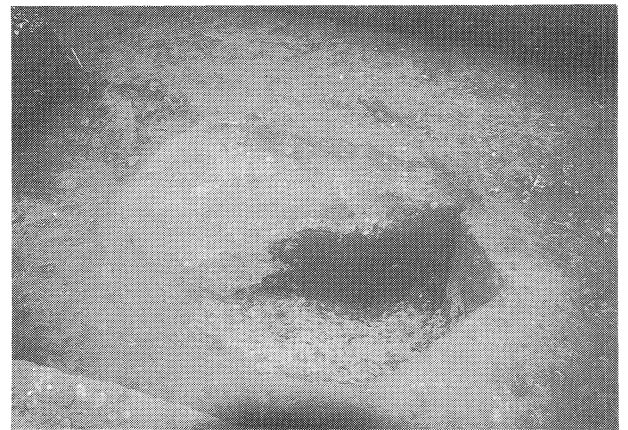


写真23 5号墓竪坑埋土の断面

4 5号墓の調査

4. 1 竪坑埋土 (図11・写真23)

埋土は2層に分けられる。黒色を呈するシルト層が羨門部を覆うように埋め戻され (②層)、その後、褐色を呈するシルト質土が埋め戻されている (①層)。①層はその色調から5層に由来するものと思われる。先に羨門部分を埋め戻すという手法は、4号墓と共通する。竪坑の埋土観察からは再度の掘り返しを示す証拠は認められない。

4. 2 竪坑・羨門・羨道 (図12)

竪坑 (写真24)

竪坑の平面は隅丸のやや不整形な方形もしくは、略円形に近い形状を呈する。長さ約1.45m、幅約1.5m、検出面からの深さ約0.7m



写真24 5号墓竪坑および羨門部

を測る。ステップは確認されなかった。竪坑は本来もう少し深かったものと思われるが、4号墓の竪坑床面と比較すると約0.4m高いことから、もともとステップが必要なほど深くなかった可能性が高い。

羨門

羨門の形状はトンネル形を呈する。閉塞は

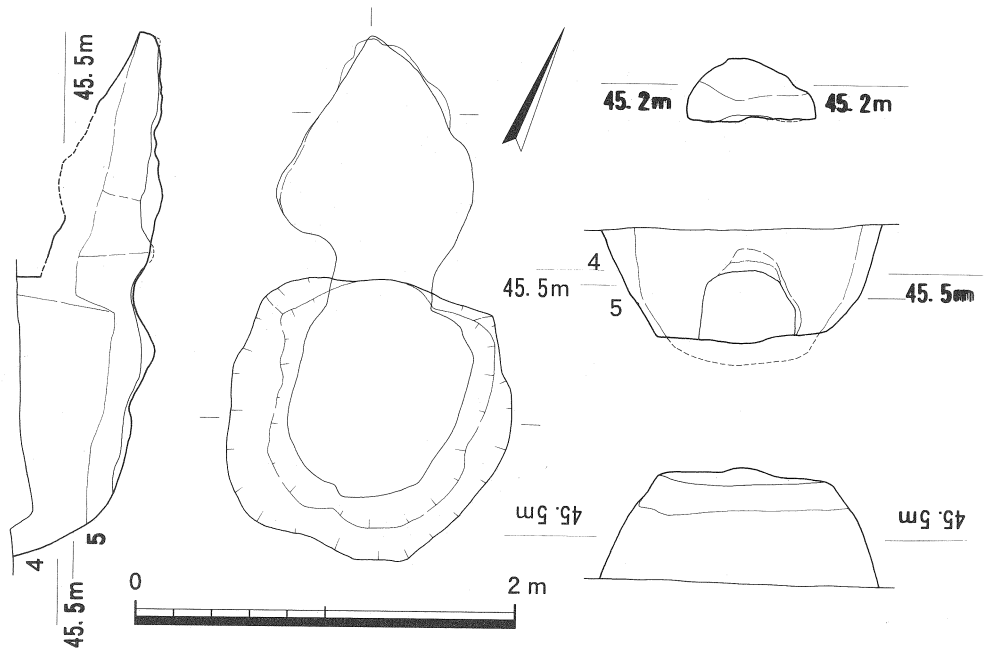


図12 5号墓埋葬施設実測図 (1/40)

板によるものと思われるが、板などの痕跡は見いだせなかった。②層と同様の土が玄室内にも多量に流入していたことから、板などの閉塞が無かった可能性も指摘できる。

羨道

羨道は竪坑北壁のほぼ中央に掘り込まれている。幅約0.5m、長さ0.2～0.3m程である。

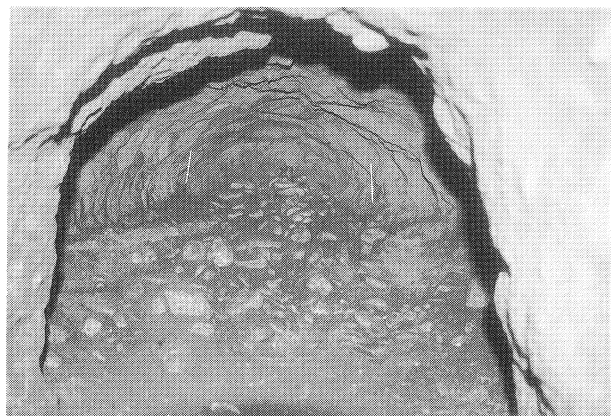


写真25 5号墓玄室内部

4. 3 玄 室

玄室の構造 (写真25)

玄室は南南東に開口する。天井の一部が崩落し、竪坑内の土砂も流入して奥壁側の一部を除く大部分は埋没していた。羨門から奥壁にかけて床面のレベルはほぼ一定である。床面には礫が敷かれており、一部羨門部にも続く。玄室の平面プランは略三角形を呈する。長さ約1.0m、最大部の幅約1.0mとかなり小型である。天井の形状はドーム形に近い。高さは崩落のため不明であるが、高いところでは現状で約0.5m程度を測る。奥に向かって低くなり、奥壁付近では0.1m程度になる。

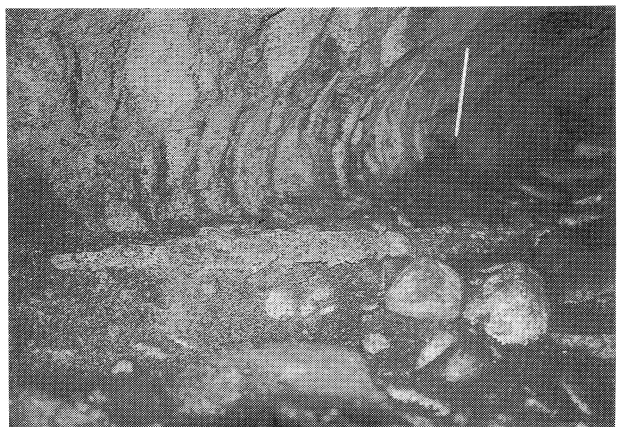


写真26 5号墓副葬品出土状況

遺物の出土状況 (図13)

玄室には人骨は遺存していなかった。玄室の大きさから考えると成人が埋葬されていたとは考えにくい。副葬品は西壁側に鉄剣1と鉄鏃2が出土した (写真26)。

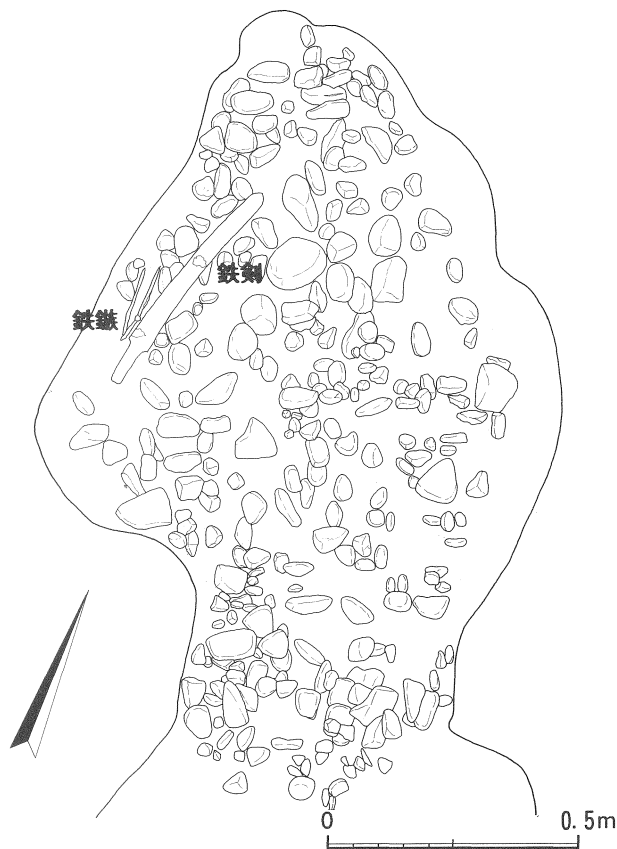


図13 5号墓遺物出土状況実測図 (1/15)

5 おわりに

今回の発掘調査では、容易に4基の地下式横穴墓の竪坑を発見できた。これは、地下レーダー探査のおかげである。

4号墓の竪坑からは、土師器の高杯や壺と須恵器の高杯が合わせて6点出土しており、前の原地下式横穴墓群を営んだ人々の埋葬儀礼を考える上で興味深い。また、4号墓の玄室内からは、鉄刀、鉄鏃、刀子、鉄斧、砥石、ガラス玉、勾玉、水晶玉、管玉などが出土している。遺存していた2体のどちらに副葬されたものか推定できており、被葬者の階

級などを考える上で、強力な手掛かりとなる。副葬品の特徴から4号墓は6世紀前半に築造され、6世紀後半まで使用されたと推定される。

5号墓は、地下式横穴墓としては、かなり小さい部類に入る。小さな地下式横穴墓は、今までにも確認されている。しかし、すべての例で、造墓の目的が解明されている訳ではない。この5号墓の玄室内からは、地下式横穴墓の副葬品として、一般的な鉄剣と鉄鏃が出土しており、未成人、特に幼・小児だけを埋葬する目的で造られたと考えるのが一般的であろうが、結論づけは類例の増加を待ちたい。副葬品の特徴から5世紀末の築造が推定される。

今回の調査区には、調査できなかった6・7号墓をはじめ、他にもレーダー探査の結果から未発掘の地下式横穴墓の存在が推定されている。今後、発掘を継続して行えば、保存良好な宮崎平野部の古墳時代人骨をはじめ、多数の考古学的・人類学的情報を得ることができるのではないかと考えている。今後も、継続して、前の原地下式横穴墓群の発掘調査を行いたい。

紙数の関係上、今回の報告は、遺構を中心としたものになった。できるだけ早い機会に出土遺物の報告を行う予定である。4・5号墓の築造年代や用いられた年代幅についての検討は、その際に詳細に行いたい。

謝 辞

調査にあたって、地主の川越節雄氏とご家族の皆様には発掘の許可を頂くとともに、様々な便宜をはかっていただきました。国富町教育委員会社会教育課の新名祐史氏には調査の計画段階から調査期間中にわたり、たいへんお世話になりました。また、宮崎県教育

委員会文化課の東憲章氏には、現地における地下レーダー探査の実施から解析に至るまで多くのご協力を頂きました。

日高正晴（宮崎県考古学会会長）、上村俊雄（鹿児島国際大学教授）、柳沢一男（宮崎大学教育文化学部教授）、本田道輝（鹿児島大学法文学部助教授）、渡辺芳郎（鹿児島大学法文学部助教授）、中園聡（鹿児島国際大学国際文化学部助教授）、中村直子（鹿児島大学埋蔵文化財調査室助教授）、橋本達也（鹿児島大学総合研究博物館助教授）、新里貴之（鹿児島大学埋蔵文化財調査室助手）、松林豊樹（宮崎県教育庁文化課）、和田理啓（宮崎県教育庁文化課）、有馬義人（新富町教育委員会）、樋渡将太郎（新富町教育委員会）、宮代栄一（朝日新聞社）、谷畑美帆（英国自然史博物館特別研究員）の諸兄姉から、ご指導、ご教示、ご協力をいただきました。記して感謝申し上げます。

文 献

第4回九州前方後円墳研究会実行委員会編(2001).

『九州の横穴墓と地下式横穴墓』, 第Ⅱ分冊:
九州前方後円墳研究会.